

ケチャップのようなゾルやゲル状のワーク(加工物)を形崩れせずにくい上げ、そのままの形を保って移し替える。一見不可能と思えることを実現したのは、長岡市滝谷町の古川機工が開発した技術「スイットル」だ。画期的な技術として、全国の製造現場に導入されている。人手不足が進む昨今、注目はさらに高まっている。



古川機工(長岡)

スイットル

形崩れせずと移動

ゾルやゲル状の加工品

自動ですくいい上げ

古川機工は1983年に古川寛康会長(77)が創業した。主に食品メーカーの依頼を受けて、製造現場の課題に応じた産業機械を、アイデアと創意工夫で作る。2006年4月に開発されたスイットルも、顧客の相談をきっかけに、古川会長のひらめきで生み出された。息子の古川琢也社長(45)は初めて見た時を振り返り、「なんだこれはって、驚きました」と笑う。

基本的な構造は厚さ5mmほどの鉄板に薄いシートを重ねて巻き付ける。鉄板をワークの下に差し込むように押し出すと、連動してシートが巻き上がり、ワ

作業効率化 注目集まる

ワークをすくう仕組みだ。鉄板を引つ込めると、シートが逆方向にずれていく形となり、すくったワークを置くことができる。

スイットルは、製造工程に大きな変化をもたらした。柔らかいハンバーグの生地やパン粉の付いたコロッケなど、人がへらなどを使って移していた作業に導入された。形崩れしないことから、スライス肉や刺し身をトレーに移

す工程にも応用でき、生産ロスが減らす効果も上げている。

古川機工では顧客の要望を受けて、スイットルの技術を用いた装置や前後の生産ラインを、合わせて提案している。導入した会社がメンテナンスしやすいように改良も重ねる。市内近郊中心だった取引先は、全国に拡大した。

各業種で人手不足が深刻化する中、単純作業を自動化して、付加価値を高める工程に人員を振り分けたいという企業ニーズが高まっている。

「自動化は細かい改善だが効果は大きい。『スイットルでないといけない』と駆け込んでもらえると、やりがいがある」と古川琢也社長。「これまでの開発経験が今のお客さんの困り事対応に生きている。スイットルの技術をもっと知ってもらえるよう、PRに力を入れたい」と話した。



ゾルやゲル状のワークを形崩れせずすくいい取り、移動できる古川機工のスイットル

(随時掲載)